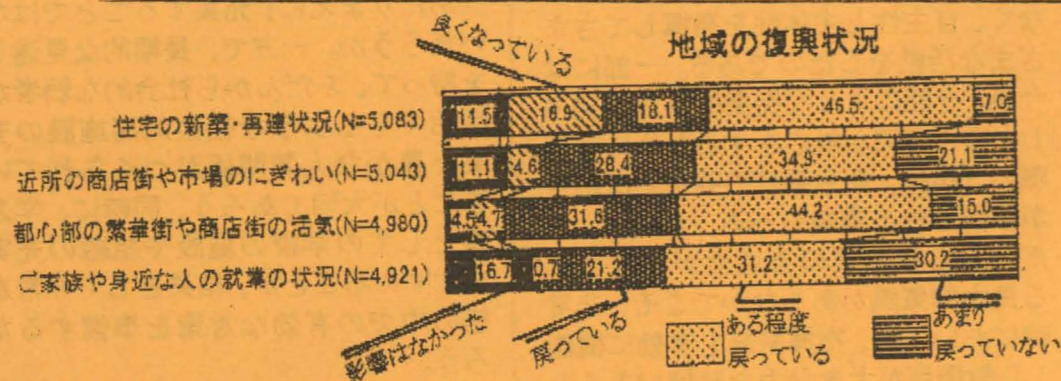
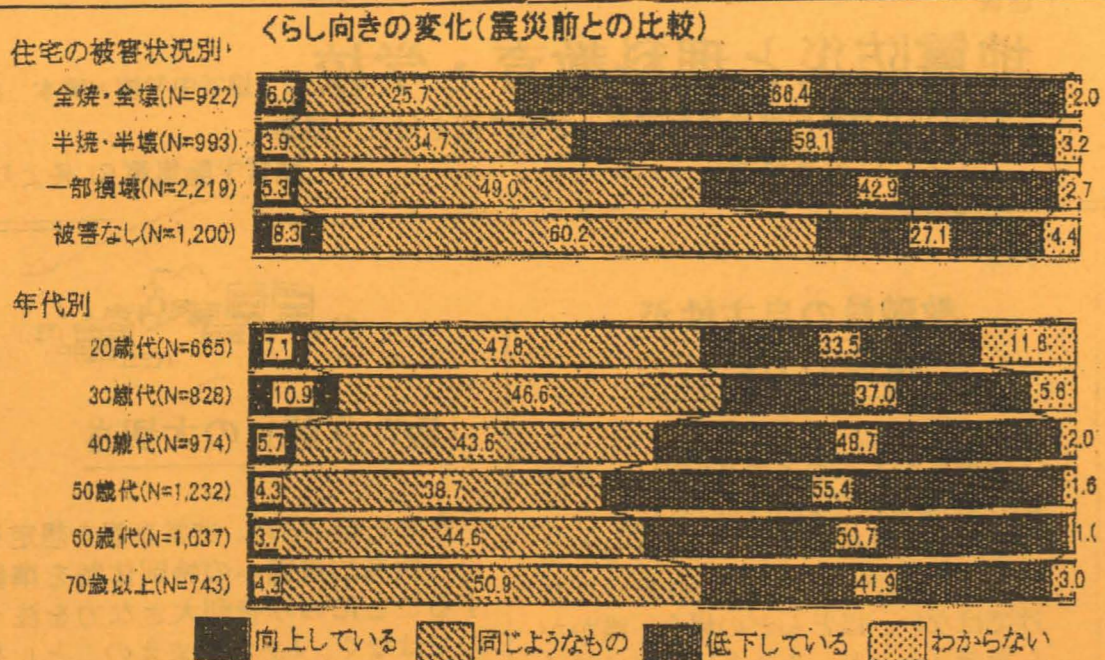


神戸市が市民1万人を対象に実態調査：結果を公表



暮らしは震災で「低下」被災の程度や年齢で差が

左の表は、地震前と比べて「生活はどうなりましたか」という設問の答えです。全壊など被害の大きかった世帯では、6割から3分の2の世帯が「生活が低下している」と応えています。被害のなかった世帯でも27%が「低下している」と応えていますが、震災後の不況の影響が表れています。

年齢別でも、明らかに「苦しさ」に差が出ており、年齢が高くなるほど深刻だということが分かります。40代・50代の働き盛りといわれる世代の半数が「生活が低下している」特に答えていることは、震災と不況の影響が深刻だといえます。



(ご意見ご感想を「絆 編集係」へお送りください)

震災復興・いまだ戻らず

被災しなかった市民も含めて、街は元に戻ったかという質問に、「良くなった」「戻った」と答えた人は全体の4割どまりで、6割以上の人は「完全に戻っていない」と、復興状況を見ていることが分かりました。

阪神・淡路大震災
〈被験者 ネット7-7ニエスリ〉

被災地だより これ以上人災による犠牲者を出さないために
強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆



全教神戸市教職員組合「絆編集係」
神戸市中央区下山手通
4・13・9中尾ビル3F
TEL-078-391-7508
FAX-078-391-8549
〒振込口座番号 01170-7-29732

第13号 2000・1・17

被災地のこれからの課題

兵庫県南部地震から5年 -神戸は今

〔大震災から5年が過ぎました〕と報道される事があります。それはまちがっています。5年過ぎたのは自然現象としての〔大地震〕からであって、社会的な出来事である〔大震災〕はまだ続いています。

仮設住宅の撤去がすすむが…

地震直後、48300戸が建設された仮設住宅。多くは被災地から離れた郊外の公園や造成地に建てられました。

大地震で自宅を失った人の多くは近くの学校に駆けつけました。避難所での過酷な数ヶ月もの避難生活のあとの仮設での生活でした。寄り合い所帯の孤独な生活の中で新たなコミュニティが模索されました。

いろいろな団体やボランティアの支援の力も借り、自治活動が活発に行なわれました。しかし、その中心になった人は、次々に仮設を後にしていきました。その後、静かで孤独な仮設生活が続きました。5年間に、仮設で孤独死した人は233人にもおよびます。5年間でやっと仮設住宅は今、役割を終え、解体作業が進んでいます。

仮設住宅を去った人でどれだけの人が震災前の場所にもどったのでしょうか。

多くの人は復興住宅などの慣れない土地で新たな課題をかかえてスタートをしました。その意味での復興は今、はじまったばかりです。

被災地にまだ残る更地

家屋倒壊が激しかった長田や須磨などでは今も更地がめだちます。持ち主が自宅や営業を再建する経済力がないとき土地は放置されるのです。再建しても、人々が戻ってこないため営業が成り立たず廃業する中小企業や自営業も少なく兵庫県の完全失業率は6.5%。神戸の求人倍率は0.23倍。公的支援は「被災者生活再建支援法」で制度はできましたが、多くの受給制限と給付額が低額であるために「生活再建」に結びつきません。

住民本位、住民が主人公の「まちづくり」のための課題も山積みで、被災者の生活再建は今からといえます。

復興宣言で幕引きをはかるのか？

しかし、被災地支援の時限立法が2000年2月に切れます。政府はこれを期に震災対策を打ち切ろうとし、神戸市や兵庫県も「復興宣言」を出そうとしています。

菅本 格

次ページへ

(1998年5月第5号より連載した「地震防災と理科教育・学校」は今回が最終回となります。上記は、筆者に今後の課題等を含めてその思いを寄せてもらったものです。) 最終回はP7掲載(全論文を含むバックナンバーご希望の方は全教神戸「絆編集係」へ)

一方で兵庫県は「厳しい財政打開のため」として「行財政改革計画」で高等学校の統廃合による教員の大幅削減を含むリストラ計画を発表しました。

「膨大な赤字で苦しい」神戸市は、「経済の活性化の起爆剤」として神戸空港建設を、多くの市民の反対を押し切り、住民投票を拒否して着工しました。

震災で問われたこと

震災で問われたことが全く忘れられているとしかいいようがありません。

それは社会的な弱者を大切にしながら、みんなで意見を出し合い、豊かな人間のネットワークをつくることの大切さだったはずで。

一方で、市民の立場から、そんなネットワークをつくり、自分たちが主人公であろうとする動きが、いろんなところで無数に作られようとしているのも神戸の姿です。

県外被災者支援交流会

下記の新聞の報道のように、交流会がもたれました。ボランティアの人々の支えもあってぬくもりのある会になりました。

**県外被災者に
交流の演奏会** 21日
兵庫県精神保健協会（こころのケアセンター）は二十一日、神戸市灘区のHAT神戸・灘の浜、なぎさ地域福祉センターで、震災後に県外避難を経験したり、今も県外に住む被災者らが集う交流会とミニコンサートを開く。

県外被災者は行政が実情をはっきりと把握しておらず、支援が届きにくい状況が続いてきた。全国各地で被災者のネットワークが生まれ、同センターも大阪や京都の交流会を支援。しかし、震災から五年近くたち、県外被災者の交流のあり方にも多くの課題が浮かび上がっている。

今回の交流会では、被災地に戻った人も含め、それぞれの現状を話し合う。会に先立ち、広島県の被災者が集う「広島のじぎくの会」代表の山田一彦さん（キタ）らのコンサートがある。

はじめに、神戸から広島に地震後転居されたギター奏者山田一彦さんとフルート奏者吉岡美恵子さんによるコンサートが行なわれました。みんなが知っている「赤とんぼ」は小さい子ども達も一緒に楽しく歌いました。



トークを交えての演奏者



想いを語り合う参加者

その後の懇談では、それぞれ帰りたいけれど帰れない事情を交流しあいました。

参加者は、千葉県、東京、横浜、京都、滋賀、大阪、和歌山、広島、全国から来られていました。

疎開した所で親切にしてもらった事、今回の会を含め一緒に行動してくれる方々に支えられて過ごしているため次第に帰りづらくなっている事など、5年間の歳月の重みを感じさせられたつどいになりました。

今後離れていてもお互いに連絡を取り合い交流が続けられるようなシステムが提案されました。帰ってきた方も帰れない方も、そしてその方々を支える人たちもそのシステムの活用を期待を寄せて終わりました。

(この件の連絡先・街づくり支援協会06-6443-3808)

被災地の子どもたちは今

兵庫県南部大地震から4年半経てなお心のケアの必要な児童生徒が4000人以上いることが、兵庫県が毎年行っている「調査」の結果分かりました。下記のグラフを見ても、時間が経ってもあまり変わらない状態が続いています。調査の結果によれば、依然として「地震の恐怖によるストレス」が最も多い要因となっていますが、二次的な要因、例えば震災に加え不況の影響で、失業による家計の困窮、両親の離婚などによる家族関係の変化も含まれます。また、時の経過とともにその要因がはっきりしない場合があり、今後数字に表れていない子どもも含めどの子ども達にも「心のケア」ができる細かな配慮がいきます。そのためにも引き続き「復興担当教員」の加配が必要であり、下記の記事に見られるように被災地では、その実現を強く望んでいます。



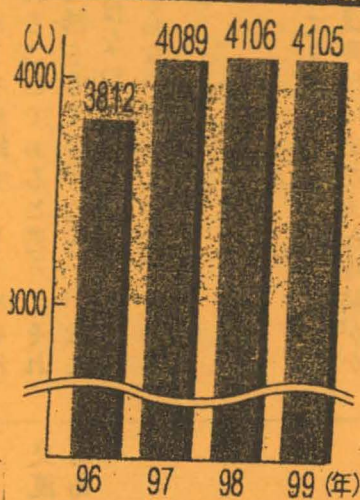
— ケア必要なお4105人

県教委は「複雑な問題が絡み合っており、長期的ケアが不可欠。担当教員の継続配置を国に要望し、専門家を交えた教師の研修を充実して心のケアへの理解と力量を高めたい」としている。

先を見据えた支援を

スクールカウンセラーを務める羽下大信・甲南大学教授（臨床心理学）の話。非日常的な体験ほど年月に関係なく残る。震災からもう五年（こころ）考えは、子どもの心の内を「見る目」を鈍らせる。震災を機に、大人たちが子どもを守るという姿勢が揺らぎ、じわじわと子どもに圧力がかかっている。子どもたちの十年、十五年先を考えれば、細かなサポートが必要だろう。

(神戸新聞より)
心のケアが必要な児童生徒数



復興担当教員 現状維持へ

震災特例4件延長へ

阪神大震災の被災地を対象に民間事業の補助率や税制上の優遇などを定めた国の特例措置で、三月末までに期限切れとなる約二十件のうち延長が決まっていなかった四件について、新たに二年間延長されることが二十日、分かった。また、被災した児童生徒の心のケアを担当する「教育復興担当教員の配置」については、現状の配置枠二百七人を維持する意向が示された。残りの特例措置の大半はすでに延長する見通しがついている。

(朝日新聞より)

延長決定は二〇〇〇年度の国予算の大蔵原案に予算が盛り込まれたほか、各省庁の担当課の話から判明した。

新たに延長が決まったのは、被災住宅の再建に低利で融資する「住宅金融公庫の災害復興住宅資金融資の受付期間」や「震災復興市街地再開発事業の補助率かさ上げ」「民生活補助金の補助率、融資比率のかさ上げ」など。

兵庫県が配置枠の減員を危惧していた「教育復興担当教員の配置」について文部省は、兵庫県側が調べた「心のケアが必要な子どもの数」が昨年と同規模だったことから、「削る判断材料がない」としている。近く配置枠が正式決定される見込み。



前号で紹介した「広島からの中学校の修学旅行生と交流」
したうちの神戸の一人、加藤いつかさんから、その時の感想
を含め次のような手記を寄せてくれました。
ここに紹介します。

手記（震災の体験を始めて語るこができた私の思い）

加藤いつか

自分のことが人に語れるようになったきっかけ
昨年八月、本山第二小学校で震災学習で訪れた広島の中学生に、震災体験を話した。今まで震災から約5年近く経過して初めて話すことをした。話す機会がなかったのと、あえて自分から話をするをどうしてもしたくなかったからだったが、今回の広島の中学生に話をするということは自分にとってプラスになったと思う。

自分のことが話せなかったのは……

今まで、話をするにも自分自身の気持ちの整理とどのように話をしていいのかもわからなかった。伝えておきたいこと、それはたくさんあるけれど、相手に判りやすいように伝えるにはどうしていいか、言葉がうまくまとまらなかった。きつとそれに、わざわざ当時の自分のしんどい思いを思い出したくなかった。それが一番大きな原因だったと思う。

「妹の死」その事実が受け入れられなくて……

震災当時、中学3年生だった私にとって「震災」の体験はとても大きな心の傷として私の中に残った。その中でも、大半を占めていたのは「妹の死」だった。つい数時間前まで元気に過ごしていた妹が地震という一瞬の出来事でこの世からいなくなってしまった。この事実を受け入れられなかったため「妹の死」は、PTSD（心的外傷後ストレス障害）として私の心の中に残った。

それは、月日を重ねるごとに、少しずつ、よくなっていくかもしれないけど忘れることは決してないと思う。そしてそれは、私の心の中で「しこり」としてこれからも残って、取り出すことができないものではないかと思う。

「自分だけではない」人それぞれがもつ痛み・そして私の場合

でも最近、それは私だけが抱えていることではないような気がしている。表面に表れるか表れないかは人によってそれぞれだとは思いますが、きつと心の根底にあるものは、微かに違うかもしれないけど、どこか似ているところはあると思える。そして、それは癒えることがない傷としてその人の心の中で時々痛みを引き起こすのでは？そんな風に思うようになった。私にとって、その痛みを引き起こすのが震災の一月十七日前であって、そんな時には必ずといっていいぐらい夜に独りでいることが苦痛で、落ち着いて熟睡する事はもちろん、目が覚めて、誰でもいいから側にいてほしい、そう思うようになってしまった。そして時々震災の時のことを思い出すかのように夢で見て汗だくで突然飛び起きることもある。それも、決まって明け方の時間帯で地震が起こった五時四十六分前後に……自分でも不思議で仕方がない。

もうすぐ一月十七日が目前に迫って来ていて、気にしないでいようと思っても、どこかに漠然とした不安と逃げ出したいような気持ちと、でもどこかで「もう五年が経ったのだから……いいかげんすっかり気持ちに整理をつけなければ」という気持ちに板ばさみになってしまふ。今では、大分落ち着いてきたけど2年ぐらいい前までは、その日が来るのが辛くてテレビも見ずに現実から目をそらしてきたような気がする。

「五年目を迎える今」

「五年目」、ある意味で区切りをつけるわけではないけれど、区切りをつけるものと区切りがつけられないものがたくさんあると思う。復興でも、「建物」それは比較的再建が早いけれど、それは外見であって、一番大切な人の「心」それがとても大変で時間が果てしなくかかることで、しかも、人によってそれぞれ差があるので、心の傷が癒えるスピードもみんな違っている。

自分のことを語ることで、私が学んだこと

今回、私が広島の中学生に話ができしたのは、少し心の傷が癒えたからかもしれないし、「人に話す」それがとても大切なことであると気がついたからかもしれない。

何も知らない人に、自分の一番触れられたくないところを話す。きつとそれは、その人にとってとても大きな壁を乗り越えられることであると思う。それを私は今回学んだと思う。だから私は機会があれば話をしたいけれど、今私に思っている。毎回スムーズに話ができるという話はないかもしれないけれど、今の私にとってとても良いことで、きつと震災を知らない人にとっても良いことであると思う。

そして、私が今一番知ってほしいこと

私が今、一番言いたいことは、「建物の復興は早くて見た感じは復興しているように思えるかもしれないけれど、実際、人の心の復興にはまだまだ時間がかかっていく。」それが、私の本心であり震災を知らない人にも知ってもらいたい。



交流後、資料室の前で、
広島の中学生と神戸の子ども達
(左端が、筆者)



広島の中学生に震災の体験を語る神戸の子ども達

「神戸のなおちゃん」の授業を通して

板谷純子

授業で震災をテーマに 子ども達と（家族愛）を話し合っ

昨年11月、私は「神戸のなおちゃん」の紙芝居を使って道徳の授業をしました。この絵本との出会いは、震災の1年後発行された時から始まっていました。「同じ神戸の先生が、手作りの絵本を作られました。私はこの本を通して、震災のことを忘れないよう、そして伝えるために活用したいと考えました。送別会の時の餞別として使ったり、東京の知り合いに手渡したりしましたが、いつかは授業の中で活用したい」と思っていました。

「神戸のなおちゃん」の物語は3つの内容から成り立っています。

1つは震災発生日の家族のこと、2つ目は避難所生活のこと、3つ目は被災地の学校のことです。

私は、一番初めの部分を「家族愛」をねらいとして道徳の授業をしました。いろんな人の力を借りてやっと授業ができたことを今でもうれしく思っています。

受け持ちの2年の子どもたちは、地震の時まだ3才ぐらいであり、またゆれていても寝ていて知らなかったという子どもも多い中での授業でした。しかし、授業の中で、火事の写真や曲がった線路の写真や傾いたビルの写真などを見るうちに、ただごとでない様子に驚き、紙芝居の中の世界へ入っていきま



沢山の先生方と一緒に

私は、この授業を通して次のようなことを思いました。

今の世の中には、子どもたちの気を引くものがいっぱいあふれています。そしてそういう物を手に入れることが幸せを運んでくれるような錯覚に陥ります。そういう時だからこそ、私たちは「家族のつながり」や「回りの人たちとの支え合い」など目に見えない物の値打について気付く子どもに育ってほしいと思います。この授業を通して、そのような「あたりまえ」だけ「日常気がつかない」ことを地震で気付いた貴重な教訓を伝える事の大切さを感じました。

「神戸のなおちゃん」がもっともっと広く、いろんなところで語られ、広まって行くことを願っております。



発表することもたち

『授業の感想』

- *お父さんがたすけてくれたんだ。やっとたすかった。お父さんがだいてくれてうれしかった。ありがとう。
 - *さいしよは、ねむれなかった。でもやっとねむったらじしんがあった。なおちゃんたちは、ジェットコースターみたいにゆさぶられた。
- そして気がつけばお父さんにだっこしてもらっていた。あたたかかったよ。

連載

地震防災と理科教育・学校

樋谷中学校・嘴本 格

—1995年兵庫県南部地震が学校と教育に突き付けた課題—

シリーズ9(最終回)

(地質学論集第51号より)

教職員の自主性が 復興の力に

予期せぬ大災害と混乱の中で、被災地の教職員はそれぞれの状況に応じてさまざまな活動を始めた。あらかじめ決められたマニュアルがあったわけではない。ほとんどの場合、誰かから指示されたり、命令されたわけではなく、自主性と主体性を発揮してさまざまな活動をしたのである。一部には、今後、今回のような突発的事態が発生した時、適切な対応をするために管理職の「指揮・命令系統の強化」ばかりが強調される議論もある。しかし、ふだんから教職員の自主性が尊重される民主的気風があるなかでこそ、非常時においても、指揮系統も有効に機能し、教職員が大きな力を発揮できるというべきであろう。



「あたり前」の大切さ

今大切なことは、非常事態を想定し、その突発的事態への特別体制を準備することにのみ特別大きな力を注ぐのではなく、「あたりまえのこと」を「あたりまえに」充実することではないだろうか。一方で、長期的な見通しを持って、ふだんから社会的な弱者が活用できるような社会的諸施設の充実と豊かな人間関係がつけられていることが大切であろう。同時に、学ぶ場としての学校の施設や組織の充実をすすめることが、結果として非常事態の中での有効な対策を準備するだろう。

最大の防災対策

また、学校における最大の防災対策は子どもたちが主人公になるような学級・学校をふだんからつくっていくことであり、子どもにとっても、教職員にとってもゆったりした雰囲気の中で、人間的な営みが繰り広げられることを通じて豊かな人間のネットワーク、人間のライフラインが作られていくことだろう。

〈完〉